

# 児童の実態に応じた発問の在り方 —教材の読み取りに着目して—

高度学校教育実践専攻  
教員養成特別コース

氏 名 川村 碧人

キーワード：言葉 発問 問い返し ReAsk 発問の分類

実習責任教員 葛上 秀文

実習指導教員 江川 克弘

## 1. 課題設定の動機

筆者の今までの授業実践を振り返ると、次の二つのパターンに分かれた。すなわち、指導案に囚われた教師主導の展開か、児童との対話を重視した結果、学びが散漫となる展開かである。このようなことが起こった理由としては、①教師が指導案の流れにとらわれたために、児童の実態よりも自分の授業展開を優先したこと、②活動の大まかな時間区分を決めることに留め、あとは児童の発言に即した授業展開にしようと思っただけで、児童の発言を基に、共に授業を作り上げるためには、発問が重要な役割を占めると考えた。

本研究では、児童に対する発問から、児童の実態に即した授業展開について考える。加えて、学習課題の読み取りに着目することで、学習の手がかりにするとともに、意見の違いなどを表出させることで、児童同士の対話を生むきっかけとしても活用できるのではないかと考え、本研究課題を設定した。

## 2. 発問について

国語辞典を見てみると、「発問」とは「問いを發すること」「問いを出すこと」「質問をすること」である。文部科学省では、「発問」は次のように定義されている。「質問」は子供が本文を見ればわかるもの。「発問」は子供の思

考・認識過程を経るもの。との記載がある。また、発問の要件として、①何を問うているのかがはっきりしていること。②簡潔に問うこと。③平易な言葉で問うこと。④主要な発問は、準備段階で「決定稿」にしておくこと。が挙げられている。以上のことを踏まえて、筆者は「発問とは、発問する側が答えとなるものを知っているが、発問される側にとって何かを考えさせようという意図があつて行くもの」、「質問とは、発問する側が明確な答えとなるものを持っておらず、発問される側に対して教えを請おうという意識があるもの」として考えていた。では、このような「発問」にはどのような効果があるのだろうか。そもそも、「言葉」には不思議な力がある。「言葉」によって語り掛けられると人は、思い浮かべ、想像してしまうのである。この「言葉」が持つ特性を授業の中で生かすことができるのが、「発問」ではないかと考える。そして、その「発問」が持つ力は大きく4つに分けられる。①子どもをその気にさせる。②子どもを育てる。③議論を活性化させる。④子どもと先生の間をフラットにする。以上のような「発問」を一括りで考え、授業に取り入れることは難しいと考えた。そのため、本研究では発問を使用する場面や、形態によって分類分けを行って考えることにした。Light Ask……………児童の将来や未来について聞くも

のに加えて、一問一答形式やクローズドクエスチョンのような児童が答えたくなる、答えやすいもの。意見に対し根拠や理由を求める際にも使うもの。Welcome Ask……児童が答えたくなる、答えやすいものの中でも、オープンクエスチョンのように学びや気づきがあるもの。反対の概念や根拠について深く聞く場面でも使うもの。Goodbye Ask……児童が答えたくないもので、気づきや学びもないもの。否定語を伴って児童をネガティブな気持ちにするもの。児童のつまづきを理由なく取り上げて、比較させることなどを含むもの。Heavy Ask……児童が答えたくはないが、気づきや学びがあるもの。通常の授業では難しいが、道徳や特別活動、学級経営などで使うことのできるもの。明確な目的をもって、児童のつまづきに焦点を当ててるものを含むもの。

上記のような発問を適切に授業の中に仕組むことによって、課題や児童の困難を正確に把握することができる。そのような情報を基に授業を展開していくことで、効率的かつ効果的な学習が可能になると考えた。

### 3. 基礎インターンシップにおける授業実践とその成果と課題

基礎インターンシップにおいて、第5学年では国語科「大造じいさんとガン」の単元を授業実践させていただいた。本単元では、登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめるとともに、それを発表し合い、考えを広げたり深めたりする、という学習である。筆者は全8時間の内、2～7時間目の授業を行った。単元の始めの方の授業では、筆者が指導案に即した授業展開に固執したことで、児童に押さえさせ

たい文章について、筆者が与える形で授業を進行している場面が見られていた。そこで、単元の学習が進むにつれて、児童との対話を基にした授業になるように ReAsk の考え方を取り入れた改善を図った。

#### (1) 成果

単元始めの授業におけるプロトコルデータと6時間目の授業におけるプロトコルデータを比較して成果を考える。すると、児童の発言量が増え、討論のような活動が見られたことは1つの大きな成果といえるのではないだろうか。児童の発言量が多いことが良い授業というわけではないが、今回の授業では、児童の発言量が増えた結果として討論のような活動までも見られた。児童の発言量が増えたことによって、児童の中にある思考が表面化し、複数の意見があることや複数の読み取り方があることに児童は気付くことができた。教材の文章や登場人物について意見を話し合うことで、深い読み取りができたのではないかと考える。

次に、発問に関してである。児童から表出した意見や発言に対して聞き返しを行う等、児童のその場の実態に即した授業展開を意識した改善ができていたのではないかと考える。児童から出た意見や発言に対して、即応的にかかわることで「自分の発言が授業に生かされている」という児童の自己肯定感を刺激しながら活動を進めることができる。加えて、児童の様子を見ながら聞き返しを行うことで、児童が今何につまづいているのかについても確認しながら活動を進めることができた。

#### (2) 課題

発言した児童と筆者または特定の児童とのやり取りが多く、活動を全体に広げられていないという課題がある。これでは、学習に参加出来

ない児童を生むこととなってしまう。そのため、ペアワークやグループワークを仕組む部分をあらかじめ用意しておいたり、児童の実態を見て柔軟にペアワークを入れたりといった改善が求められる。

次に、ふりかえりから本時の学習課題へのつながりが薄いことが挙げられる。筆者の目指す授業は共にめあてを作り上げ、学習に必然性のある授業だが、単元始めの授業におけるプロトコルデータから判断すると、なぜ心情に着目して読んでいくのかつながりがない。これについては単元導入の際に、なぜこの学習をしていくのか、この学習が終わったらどうなるのか明確にしながら、しっかり価値づけを行っていきたいと考える。

このような課題を克服するために、発問を冒頭で述べた定義のもと“Light Ask”

“Welcome Ask” “Goodbye Ask” “Heavy Ask” に分類して、導入や展開でそれぞれの発問の特徴を生かした授業展開を行っていきたいと考える。

#### 4. 総合インターンシップにおける授業実践とその成果と課題

総合インターンシップにおける授業実践では、第4学年国語科「ごんぎつね」の単元を授業実践させていただいた。基礎インターンシップで判明した課題を基に、授業の計画を行った。導入部分において、学習に向かう雰囲気を作り、短い時間の中で既習事項や本時で学ぶことを意識させるための発問を仕組むようにした。今回の授業実践では、読み物教材を扱ったので、今までの学習内容や本時の場面設定などについて尋ねる Light Ask を取り入れた。活動の展開部においては、特定の児童との一対一の

やり取りを避けるために自分だったらどうするか、みんなだったらどうするか、という自分事として考えさせる発問から発展し、今までの経験についても振りかえさせるような発問、Welcome Ask や Heavy Ask を考えた。特に、今回の教材である「ごんぎつね」はいたずらをして反省から償いをするという物語である。そのため、児童の暗い感情を振り返らせることになる。それでもこのような発問を行うことで、自分と登場人物との違いに気づき、なぜそんな違いが生まれたのかを考えるために教材を詳しく読み込むことができるのではないかと狙いがあった。

##### (1) 成果

導入部分において、児童がすぐに答えられるような発問である Light Ask を用いることで、限られた時間の中で児童との軽快なやり取りにより学習の雰囲気と本時の学習の下地を作ることができたのではないかと考える。本時では、場面の時間と場所について確認することと、前時の学習からの続きであることを押さえた。

展開部分においては、ごんの行動に対して、児童とは別の視点から、揺さぶりをかけるような逆転発問も取り入れた。この際、児童がいたずらして反省した経験を思い返させるような Heavy Ask を取り入れた。この発問により、自分の暗い感情とごんの感情を比較して、ごんには褒められたい気持ちもあるが、償いの気持ちが大いことに気づかせることができた。

基礎インターンシップでの課題であった発問の種類については、「みんなだったらどう（する）」「同じような考えの人は」といった問い方を増やしたり、授業のそれぞれの場面に適した種類の発問を取り入れたりとできたと思う。発問の種類が増えたことで、自分の気持ち

と登場人物の心情の違いから、登場人物の行動の理由に迫ることができたかと考える。

## (2) 課題

発問の主旨を取り違え、筆者が途中まで話して、途中で止める。続きを児童が発言する。という形式が多くなってしまった。本文についての一問一答形式での学習となっており、これでは発問とは言えず、児童の学習が深化したとは言えないだろう。Welcome Askによって児童の多様な考えを引き出すことができず、教師主導の誘導的な授業展開になってしまったと考える。「みんなだったら」という発問から、ごんの人間らしさやごんに自分を投影させるが、ごんに対する理解を深められていなかった。次時の学習で児童が書いた感想文を見てみても、初発の感想よりは内容に詳しくなっていたものの、学習を通して自分がどう感じたかについての記述は少なかった。これは、筆者の授業があらすじを追うような授業になってしまっていたからだと考える。また、指導計画から時間的に無理のある計画を組んでしまい、発問とそれに対する話し合いの時間を十分に取れなかった。今回は単純に文章量で指導計画を立てたが、児童に深く考えて欲しい内容の多さに違いがあるため、文章量ではなく、思考に使う時間や内容によって指導計画を考えなければならない。結果として、意見の違いの表出や児童同士の対話など、筆者が理想とする授業とはかけ離れたものになってしまった。

そこで、以下の三点に気を付けて改善を図りたい。

### ・指導計画の練り直し

今回は単純に文章量で指導計画を立てたが、児童に深く考えて欲しい内容の多さに違いがあ

るため、文章量ではなく、思考に使う時間や内容によって指導計画を考える必要がある。

### ・誘導的な発問や一問一答形式の発問を見直し

本時の中で重要な部分について、より焦点化を行うことで、学習に深みを持たせる。加えて、思考する時間の確保にもつなげることができる。

### ・児童同士をつなげる意識

同じ意見や異なる意見が出た場合には、他の児童にも発表させてみる。そうすることで、読み取りに多様性が生まれる。

## 5. おわりに

筆者の目指す「児童を主体とした授業」に向けて、発問という方向から研究を行ったことによって、授業改善の方向が定まった。今までは、その時の授業実践のよって改善の方向性が異なってきた。だが、今回の研究により、発問を変えていけば児童の反応が変わり、授業そのものが変わっていくということが実感できた。この二年間では改善しきれなかったが、今後の教員生活を通して改善し続けるものが見つかったことが大きな学びとなった。今回、課題として残った誘導的な発問などだけでなく、効果的に発問を行い、児童の考えを引き出すことのできる板書やワークシートも含めた研究を進めていきたいと考える。

### 引用文献

森ゼミ (2019) 森ゼミ研究室にて

森康彦 木下光二 藤原伸彦 若井ゆかり

(2018)『学生の授業実践力向上を目指した Reask モデルの構築』 鳴門教育大学学校教育研究紀要

栗田正行 (2017)『「発問」する技術』 東洋館出版社